未来を拓く

居場所ハウス

いばしょハウス　第１回

お客さん、としての参加を越えて

試行錯誤も許容し合う

2013年6月13日、岩手県大船渡市末崎町（まっさきちょう）に東日本大震災からの復興の拠点として「ハネウェル居場所ハウス」（以下、居場所ハウス）がオープンした。

「居場所ハウス」のアイディアは、米国ワシントンＤＣの非営利組織「Ibasho」が提唱する8つの理念がもとになっている。その理念の1つとして「地域の人たちがオーナーになること」が挙げられている。「居場所ハウス」は高齢者を中心とする地域の人々が、お客さんではなく、良いことも悪いことも引き受けながら場所を作りあげ、それを通じて地域をより良くしていく当事者になるために開かれた場所である。

地域活動に参加したいという高齢者は多い。内閣府が2013年度に実施した「高齢者の地域社会への参加に関する調査結果」によると、回答者の約7割が何らかの社会参加活動に参加したいと回答している。

「居場所ハウス」の活動にも多くの高齢者が参加している。ただし、それは、既存の活動にお客さんとして参加するというものではない。

「居場所ハウス」の建物は、米国ハネウェル社の社会貢献活動部門「ハネウェル・ホームタウン・ソリューションズ」の基金からの寄付を受け、陸前高田市気仙町の古民家を移築・再生したものである。オープンまでに米国の「Ibasho」、「オペレーションＵＳＡ」と、社会福祉法人典人会、有限会社伊東組、北海道大学建築計画学研究室など国内外から多くの協力を受け、オープン後の運営は地域の高齢者を中心メンバーとするＮＰＯ法人「居場所」創造プロジェクトが運営を担っている。

カフェ的なスペースでは訪れた人々が思い思いに過ごす（上）。毎月欠かさず開催されている運営のための定例会

「居場所ハウス」は10時から16時までのカフェ的なスペースの運営を基本としており、昨年のオープンから1年間に約5500人が訪れた。「居場所ハウス」が踊り教室、生花教室などを主催したり、地域の人々が会議や同級会を開いたり、近くにある末崎地区サポートセンターが健康クラブを行ったりすることもある。ただし、地域の人々は教室やイベントに参加するだけでなく、様々なかたちで運営にかかわっている。

その1つが運営のための定例会である。オープン直後の2013年6月29日から毎月1回、欠かさずに開かれている会議で、毎回10名ほどが参加している。定例会では運営で生じた課題や環境整備などについて情報共有、意見交換したり、これから実施するイベントに向けた打ち合わせなどを行っている。

定例会以外にも仕事の経験を活かして、花・植木に水や肥料をやったり、収納や本棚などの大工仕事をしてくださる方。手作りのお菓子や漬物、畑で採れた野菜、養殖したワカメや貝を差し入れたり、薪ストーブ用の薪を持って来てくださる方。薪ストーブに火をつけたり、毎日夕方に戸締りの確認をしたり、食材や備品の買い出しをしたり、裏方の仕事をしてくださる方。あるいは、イベントのチラシを配布したり、有益な様々な情報を教えてくださったり、楽しいおしゃべりで場を和ませてくださったりと、ここには到底書き切れない多くの人々のかかわりによって運営が成立している。

もしも、限られた人や専門家がサービスを一方的に提供する場所であれば、こうした多様なかかわりは行われなかった可能性がある。多様なかかわりがなされていることが、地域で運営していくという雰囲気が生まれていることの表れだと言ってよいだろう。

もちろん、限られた人や専門家が運営するのに比べれば、スムーズな運営ではないのかもしれない。実際、様々な課題もあるし、時には意見が対立することもある。例えば、以前は毎日ボランティアスタッフ1～2人が交替して運営を担当していたが、うまくいかなかったこともあり現在はパートスタッフも加わって運営を担当している。このように、ポジティブな意味で、地域には「居場所ハウス」の運営において試行錯誤する自由が許容されていると言える。

「居場所ハウス」において、地域の人々は何かしてもらうことを期待し、期待が満たされなければ苦情を言うだけのお客さんではない。得意なこと、好きなこと、できることを通して運営に協力したり、議論し合って試行錯誤したりしながら、共に場所を作り上げ、さらには地域をより良いものに変えていける当事者なのである。

田中康裕　大阪大学大学院建築工学専攻博士後期課程修了。専門は建築計画学、環境行動学。人間と環境とのかかわりに注目し、コミュニティ・カフェなど地域住民が運営する施設でない場所（まちの居場所）の研究を行っている。2013年５月より岩手県大船渡市で「Ibasho」のリサーチ・フェローとして「居場所ハウス」の調査研究、及び、運営のサポートを行っている。共著：日本建築学会編『まちの居場所』東洋書店など。

未来を拓く

居場所ハウス

いばしょハウス

第2回

高齢者になっても教え・教わる存在

人は学び変わり続ける

2013年6月に、岩手県大船渡市末崎町にオープンした「居場所ハウス」では、「高齢者が知恵と経験を活かせること」を大切な理念としている。高齢者が医療や介護サービスを受けるだけでなく、これまでの生活で身につけた知恵と経験を活かしながら、「居場所ハウス」の運営やより良い地域作りのための役割を担えること、そして、住み慣れた地域に少しでも長く住み続けられるようにすること。このことを大切にしながら、「居場所ハウス」の運営は行われている。

食事には心身の健康を維持したり、コミュニケーションを図ったり、文化を継承したりと豊かな意味があるが、「居場所ハウス」ではカフェ的なスペースを運営しているため、地域の人々が飲食を共にすることができる。高齢者を中心とする地域の人々が、ひっつみ汁、がんづき、鎌餅（かまもち）などの郷土食を作ったり、差し入れたりしてくださることもある。

ある日、近くに住む女性が「かぼちゃけ」（カボチャと小豆ともち米が入ったお粥）という郷土食を作ってくださった。「子どもの頃食べたけど。50年は食べてない」と80代の方が話すように、最近ではほとんど食べなくなったようで、若い世代のパートスタッフは「作ったことも、食べたこともない」と言って、どのように料理するのか興味をもって覗きこんでいた。できあがったカボチャのお粥を食べながら「オラ、初めて食べた。子どもの頃出されたけど、ドロドロして見かけが悪かったから、嫌だと言って食べなかった」という思い出話も。こうした思い出は、普段は思い出すことがなくても、何らかのきっかけがあれば溢れるように蘇ってくる。

別の郷土食である鎌餅作りが行われた時には、「昔の鎌餅はごろっと大きくて。黒砂糖だけだったけど、今は贅沢になってね、味噌だのクルミだの入ってる」、「昔は、余ったご飯を入れて作った。ご飯入れると、いつまでも皮が柔らかい」、「鎌餅は簡単に作れるから、昔は、子どもが遊びから帰って来たり、大人が野良仕事から帰って来た後、夕食ができるまでの間に食べてた」などの思い出を話してくださる方もいた。いずれも、地域での暮らしにまつわる貴重な記憶である。

カフェ的なスペースを運営していると言っても、「居場所ハウス」は商業施設でないため、来訪者が食べ物を差し入れたり、厨房で料理したりする。そのため、来訪者から郷土食の作り方を教わることが日々の運営の中で行われることがある。また、飲食を共にできるから、郷土食にまつわる貴重な話を聞くこともできる。このように、高齢者から知恵や技術、生活の記憶を継承することは、「居場所ハウス」が担いうる大きな役割である。

けれども高齢者は、知恵や技術を若い世代へ教えるだけの存在ではないことを、「居場所ハウス」の人々は気づかせてくれる。郷土食の「がんづき」作りの教室を開催したことがある。地域には長年、自分なりのやり方で「がんづき」を作ってきた人も多いが、もっと上手く作れるようになりたいと教室に参加した人もいた。何人かの参加者は、「復習しないと忘れるから」と言って、「居場所ハウス」で一緒にがんづきを作り、皆に振る舞ってくださった。

2014年5月から、末崎町に住む高校生のSさんから、新日本舞踊を教わる「おどり教室」が始まった。Sさんは子どもの頃から習っている踊りを通して、地域に貢献できないか。こうした話から始まった活動である。「おどり教室」は月に1～2回ずつ開催されており、参加者は孫のようなSさんから休憩を挟んで1時間ほど新日本舞踊を教わっている。これまでの参加者の中で最年長だったのは90代の女性で、Sさんの曽祖父が同級生だとのこと。「おどり教室」の参加者の何名かは、せっかく教わった踊りを忘れないようにと、自主的な練習会も行っている。

何かを教えるというと、歳上から歳下に教えるというイメージがあるが、「おどり教室」は教え・教わるという関係が年齢に関わらず成立すること、何歳になろうとも新しいことを学べることを気づかせてくれる。また、復習のためにがんづきを作ったり、踊りを自主的に練習したりするというように、「居場所ハウス」では教室が1回だけで完結するのでなく、教室で新たなことを教わった経験が、次へつながるコミュニケーションのきっかけにもなっている。

何歳になっても教えたり、教えられたりできる関係を持ちながら、生活していくこと。これが、高齢者が住み慣れた地域で、豊かに住み続けることだと言える。こうした関係を実現するためには、豊かな知恵や経験を持った完成された存在としてだけでなく、新たなことを学びながら、変わり得る存在でもあるというように、高齢というものに対する眼差しを変えることが求められる。

（「Ibasho」リサーチフェロー・田中康裕）

郷土食のカボチャのお粥を作る女性。パートスタッフが後ろから興味津々で覗きこんでいる（上）。地域に住む高校生が講師を務める「おどり教室」

未来を拓く

居場所ハウス

いばしょハウス

第３回

「居合わせること」がすべての始まり

場が持つ無限大の可能性

「居場所ハウス」は公民館や集会所と同じでないか？　と言われることがある。確かに、地域の人々が集まるという点で似ているように見えるが、「居場所ハウス」と公民館・集会所とでは人々の集まり方に大きな違いがある。公民館や集会所は、会議や教室などの予定がある時に利用する場所であり、予定がない時は鍵がかかっていることが多い。一方、「居場所ハウス」はカフェ的なスペースがオープンしている間であればいつ出入りしてもよいし、何らかの活動に参加することが求められることもない。そのため「居場所ハウス」では様々な目的をもった人々が居合わせることができる（※1）。

そして、最初は居合わせるだけであった人同士が徐々に顔見知りになったり、思わぬ人と居合わせていたことに気づく、という状況が生まれる。

大船渡市末崎町の人口は約4400人であり、父母が、祖父母が末崎町民という人も多い。そのため「私は○○さんと親戚」、「○○さんと○○さんは兄弟」という会話をよく耳にする。けれども、当然ながら全住民が顔見知りというわけではない。何十年も別の土地で暮らしていて、退職してから末崎町に戻って来た人もおり、そういう人が居合わせた人と少しずつ顔見知りになっていくこともある。また「あぁ、○○君のお母さん。どっかで見たことあると思った」、「○○さんだよね？　どこか面影あるね。○○さんの同級生でしょ」という会話のように、居合わせた人が家族や知人の知り合いだったという出会いもある。このように「居場所ハウス」がきっかけで地域の中で広がりのある関係が築かれている。

90代の女性・Aさんと80代の女性・Bさんも「居場所ハウス」で顔見知りになり、話をするようになった2人である。2人は頻繁に「居場所ハウス」にやって来るため、姿を見ない日が続くと周りが心配するという状況も生まれている。

ある日のエピソードを紹介したい。午前中にやって来たAさんは、「最近、Bさん来ないなぁ」とBさんのことを気にかけていた。そのBさんは、Aさんとすれ違いに午後からやって来た。「Aさん、最近来てる？　昨日、Aさんの家の近くに救急車止まってたから」とAさんを案じるBさん。互いに気遣い合う2人だが、この関係は2人の中で閉じたものではなく、「居場所ハウス」で居合わせた人たちにも、2人が互いに気遣いあっていることが認識されている。

互いに気遣い合う2人と、その2人の関係を見守る周りの人々。このような広がりを持った関係は、組織化された関係に比べると弱いかもしれないが、災害時にまず一緒に行動するのは、遠くに住む同じ組織の人でなく、同じ地域に住む人々である。弱くとも広がりのある関係が築かれている地域が、災害時や災害からの立ち直りに強い地域と言えるのではないだろうか。加えて、「居場所ハウス」の周囲では現在、高台移転のための土地の造成工事が進められている。「居場所ハウス」が、周辺に新たに転居してくる人が広がりのある関係を築いていくきっかけになればと思う。

居合わせた人との会話から、思いがけない方向に話が展開していくこともある。ひな祭りを企画した時、あるスタッフが、文化の継承のため昔から伝わるひな人形を展示したいとメモに書いたところ、メモを読んだ女性が「うちに70年前の泥人形あるよ」と言って、高田人形と呼ばれる今となっては貴重な土製の人形を持って来てくださった。「うちはお金持ちじゃなかったから、毎年1つずつ買ってもらった」人形だとのこと。この人形を展示していたところ、それを見た別の女性も「長屋のどこかにしまってある」と高田人形を持って来てくださった。喧嘩をしないようにと、祖母が毎年、姉妹ぞれぞれに1つずつ買ってくれたとのこと。今回、何十年かぶりに長屋から出したそうで、「おひなさんも、みんなに見てもらって幸せだなぁ」と女性。

こうして、思いがけず貴重な高田人形を展示することができ、それにまつわる貴重な話を聞かせてもらうこともできた。

繰り返しになるが、「居場所ハウス」は公民館や集会所のように、会議や教室の時にだけ訪れる場所ではないため、様々な人々が、様々な目的を持って訪れる。時には何らかのきっかけで居合わせた人同士の会話が始まることがある。そこから広がりのある関係が築かれたり、思いがけない方向に話が展開していくこともある。地域の人々が居合わせることのできる場所があるからこそ、生み出されるものは多い。

（「Ibasho」リサーチフェロー・田中康裕）

［注］※1　「居合わせる」とは「別に直接会話をするわけではないが、場所と時間を共有し、お互いどの様な人が居るかを認識しあっている状況」のこと（鈴木毅「体験される環境の質の豊かさを扱う方法論」・舟橋國男編（2004）『建築計画読本』大阪大学出版会）。

現在、「居場所ハウス」の周辺では高台移転のための造成工事が進められている（上）。持参して下さった高田人形を見ながら、思い出話をする人々

未来を拓く

居場所ハウス

いばしょハウス

第4回

「地域を作り上げる」誰もが当事者

試行錯誤から広がる関係

「居場所ハウス」は国内外の団体からの協力を受けてプロジェクトが進められたが、建物を建てて終わるのではなく、少しでも地域に根差した場所となるよう、オープンの1年以上前から時間をかけ、地域の人々を交えたワークショップが行われてきた。

ワークショップ以外にも、運営の中心となるメンバーによって運営方法や建物の設計、備品などについてのミーティングも重ねられてきた。しかし当然のことながら、地域の全住民がワークショップやミーティングに参加するわけではなく、運営が始まればワークショップやミーティングに参加したことがない人が次々にやって来る。そのため、新たな人々が入り込む余地が残されている必要がある。また、運営が始まれば新たに必要な備品が出てきたり、「この部分をこうしたい」という意見も出てくる。そのため、備品を徐々に揃えたり、空間に手を加えたりできることも大切である。

「居場所ハウス」は米国ハネウェル社の社会貢献活動部門「ハネウェル・ホームタウン・ソリューションズ」の基金からの寄付を受けて建設された。寄付金の一部は、オープニングまでに使い切るのではなく、運営が始まってから必要な備品を揃えることができるようにと、運営協力金として確保していただいた。実際、運営が始まると必要な備品がいくつも出てきたため、運営のための定例会などで意見交換しながら、必要な備品を揃えていった。また、なるべく既成の商品を買うのではなく、材料を買い手作りで場所を作っていって欲しいという考えから、本棚、キッチン奥の倉庫の棚、2階（物置）への梯子などは材料を購入し、現役時代に建築関係の仕事についていた方が手作りで作ってくださった。

運営協力金を使う以外にも、板の間だった部分に畳を敷いたり、勝手口を取り付けたりと空間に手を加えている。敷地についても必要に応じて手を加えるという考えから、最初は舗装していなかった。そして、運営が始まってから花壇を作ったり、畑を作ったり、駐車場を作ったりと環境の整備を行っている。このように「居場所ハウス」では徐々に備品を揃えたり、建物内外の環境整備を行っているが、どのような備品を購入するか、どのように環境を整備するかを議論することが自体が、地域の人々にとってのコミュニケーションのきっかけになっている。

また、備品の購入や環境整備といったハード面だけでなく、今後どのように運営していくかについても議論を重ねている。現在、「居場所ハウス」は補助金を受けて運営している。しかし今後の運営については、大きな備品を買ったりイベントをしたりする時には補助金を使うことがあっても、日々の運営まで補助金に頼るのは好ましくないということで、スタッフの意見は一致している。その具体的な方法を見つけていくことが今後の大きな課題だが、運営のあり方については次のような2つの案が出されている。

「居場所ハウス」は大船渡市末崎町の中でも、保育園、小学校、中学校などが集まる中央地区に位置し、周辺の高台移転が完了すれば人口が増える。しかし、周辺には食事ができる店がほとんどない。そこで、一人暮らしの高齢者を支援するという意味でも、「居場所ハウス」で昼食を提供できないかというのが、1つ目の提案である。また、末崎町はワカメ養殖発祥の地であり、ワカメを始めとする豊かな海の幸がある。農業をしている人、郷土食を作るのが得意な人、手芸が得意な人もいる。「居場所ハウス」でこれらを扱う産地直売のマーケットを開催することで、お金がまわる仕組みが作れないか。それによって地域に特産品を定着させることにつながれば、高齢化の歯止めにもなるのではないかというのが、2つ目の提案である。

これらはまだ提案の段階であり、実現するためには課題も多いが、課題をクリアするために議論することがコミュニケーションであり、「そのことなら、あの人に聞いてみよう」「あの人に頼んでみよう」というように、知人へ、そのまた知人へと話をすることが、「居場所ハウス」をきっかけとする広がりのある関係を築いていくことにもつながっている。

「居場所ハウス」では試行錯誤しながら、徐々に場所を作りあげている。ただし、それは地域の全住民がワークショップやミーティングに参加するわけではない、オープンするまでどのような備品が必要になるかわからないという消極的な理由だけで、こうした試行錯誤が求められるわけではない。完成された場所のお客さんでなく、場所を作りあげ、より良い地域を作っていくための当事者であるためには、試行錯誤というプロセスを経ることが不可欠なのである。2年目の運営がスタートした「居場所ハウス」はまだ運営の方向性について試行錯誤しているが、様々な可能性があるから試行錯誤できるのだと積極的に捉えて、これからも徐々に場所を作っていきたい。（「Ibasho」リサーチフェロー・田中康裕）

現役時代、建築関係の仕事に携わっていた方による手作りの本棚（上）。敷地内の畑で野菜を収穫

未来を拓く

居場所ハウス（いばしょハウス）　第5回

外からの関わりで地域をつなぐ

補い支え合う社会へ

近年、地域の人々が気軽に立ち寄ったり、活動したりできるカフェ的なスペース（コミュニティ・カフェと呼ばれることもある）が各地に開かれている。地域の人々の思いがきっかけとなり開かれる場所もあれば、行政など地域外からの働きかけで開かれる場所もある。「居場所ハウス」は東日本大震災の被災地において、地域外からの働きかけをきっかけとして開かれた復興の拠点である。地域の場所に外部の者が関わることにはどのような意味があるのか。連載の最終回では、筆者の役割を振り返りながらこの点を考えたい。

筆者は「居場所ハウス」のオープン直前から大船渡で生活し、研究者として「居場所ハウス」の調査、及び、運営の支援を行っている。「居場所ハウス」での筆者の役割の1つは、日々の出来事を記録することであり、イベントの時だけでなく、イベントのない時の様子なども写真に撮り、「居場所ハウス」内に展示している。

「○○さんが写ってる」、「こんなイベントもしていたのを初めて知った」と言ってくださる方もおり、展示した写真は「居場所ハウス」を知ったり、歩みを振り返ったりするきっかけになっている。日々の出来事を記録すること、展示やウェブサイトなどでの情報発信というように、目に見える形で記録を編集すること。こうした作業の蓄積によって「居場所ハウス」の歴史や価値が共有されていくと考える。

もちろん、外部の者でなくても日々の出来事は記録できるが、見慣れたものを記録し続けることは意外と難しい。初めて目にするもの、普段見慣れないものの方が記録しやすいのである。つまり、外部の者は地域の人々が見過ごしてしまう日々の出来事を、記録しやすい立場にあると言える。

また、外部の者には地域外で築いている関係があるため、「居場所ハウス」と他地域の人々との媒介者になることがある。例えば、東京に住んでいる筆者の知り合いが「居場所ハウス」に来て絵手紙教室を開いてくださったことがある。筆者の知り合いだけでなく、被災地支援のため遠くから来てイベントや教室を開いてくださる方も多い。また、地元で収穫した茄子やピーマンを「居場所ハウス」に送ってくださる方もいるし、逆に「居場所ハウス」のある末崎町の特産品であるワカメをお礼に送るといったやりとりがなされることもある。

今後、人口が減少していく我が国では、地域がそれぞれの特色を活かしながら、人や物、情報など足りないものを補い合い、支え合うことが大切になる。さまざまだが、その具体的な形が「居場所ハウス」で生まれつつある。「居場所ハウス」をきっかけとして生まれたこうした関係をどう継続させ得るかを考えていきたい。

ただし、外部の者は、遠く離れた他の地域の人々との関係を媒介するだけにとどまらない。地域には良くも悪くも様々な人間関係が築かれているが、外部の者はそれらの人間関係の周縁にいるため、時として人間関係を越えた関わりを持つことができる。地域に築かれている人間関係の中には、外部の者はそう簡単には入り込めない。しかし、だからこそそれらの間を行き来し、結果として同じ地域に住む人同士を媒介できることがある。

地域には様々な当たり前がある。記録するまでもない当たり前のこと。この人とは関わり、この人とは関わらないという人間関係の当たり前。外部の者はこうした当たり前を共有していないからこそ、それらを記録したり、媒介したりしやすいと言える。

先に筆者は「居場所ハウス」で運営の支援をしていると書いたが、一方的に支援しているわけではない。筆者が上手く運営する答えを知っているわけではないし、運営について一方的にアドバイスする立場でもない。それどころか、末崎町という慣れない土地での住まいや食事など、地域の方々はいつも筆者のことを気にかけてくださっている。

哲学者、鷲田清一氏の言葉に次のようなものがある。「他者への（ひととしての）関心が、相手の側に逆方向の〝他者への関心〟を呼び起こすということ、こういう反転がケアの核心にはあって、ケアといういとなみの相手を〝お客様〟として遇することは、管理としてのケアと同じく、この反転の可能性をこそあらかじめ殺いでしまうということである」（※）。

ケアだけでなく場所作りや震災復興でも、一方的な支援の弊害が指摘されることは多い。支援しながら、しかし、それが過剰にならないような支援とは何か。慣れない土地での生活を始めた時に、一方的に支援する立場ではあり得なくなった筆者のことを振り返れば、生活の時間を共有することにそのヒントがあるように感じる。支援し／支援されるという関係が築かれたところにこそ、外部の者だけでも、地域の人々だけでも作れないような場所が実現されるのである。

（終わり）

（※）鷲田清一『思考のエシックス』ナカニシヤ出版・2007年

（「Ibasho」リサーチフェロー・田中康裕）

「居場所ハウス」内に展示した活動の写真（上）。絵手紙教室の様子